

比島戦記 後編  
カシブより敗戦まで

鳥取県 岡崎 誠 友

―転進・昭和二十(一九四五)年七月―  
(カシブ盆地で二週間休養)

七月一日、第二中隊はビノンから小高い山道を進み、カシブ盆地の南西の少し民家が散在している所に着きました。細い山道に、同期入隊で甲幹の少尉になり徒歩小隊長をしていた小島誠也少尉が道端に蹲っている。「どこか悪いところがあるの」と問うたら「足の傷が痛むので、当番兵に衛生兵を呼びに行かせて待っているところだから、

俺に構わず前進してくれ」と言うのです。私は「先に行きます。大事にして下さい」と言って別れました。

彼は衛生兵により連隊本部の軍医の所に連れて行かれ、後日、連隊の主力の出発後も軍医の下で治療していたことを耳にしましたが、その後の確かな行動は分かっています。田淵兵長の話では敵兵と一戦を交え戦死したとの話もありました。確たる目撃者ありませんが、護国の英霊となつたことは悲しく痛ましいことでした。

小西分隊長は食糧の徴発のため、手分けして出掛けました。二キロほど歩いて農具小屋のある畑にたどり着くと、保存して有る籾を分隊長が見付け、歓声を上げて皆で携帯天幕に包んで意気揚々

と分隊の家に帰りました。三日ほどには、近くに流れている小川で、台湾以来着たきりの夏軍衣や襦袢、袴下、靴下等を洗濯、川辺で干して乾くのを待っていました。これで随分さっぱりしました。

七月七日、連隊はこの七夕の日に、各中隊は軍装して近くの林の中の広場に集まり、相沢少佐連隊長、秋山第一大隊長、第一・二・三中隊長、第二大隊の将兵が整列し、ラッパ吹奏、僧籍の兵の読経、連隊長はバレテ、サラクサク峠以降の戦死、戦病死した英霊に丁重な弔文を奏上して慰霊祭が執り行われました。

敵の観測機が操縦士の顔が見える位低空で飛んで来て、癩に触る思いがしました。師団の全部がカシブ盆地に集結するので、狭い盆地は兵隊で溢れるようになりましてので、師団は兵力が多い輜重兵連隊に、七月十四日にカガヤン河上流のピナパガンを集結目的地としてカシブを出発するよう命令が下されました。

師団が携行している地図では、直線距離は四、

五日で到着するとの予想であるため、糧秣は五、六日分の携行と決められました。私は分隊の基幹兵と言うことで、中川小隊長から前日に、小隊の落伍兵のために靴下二本に入れた粃米を余分に携行、救援する時まで持つて行くように命ぜられました。

盆地に着いてから出発するまで、気が弛んだためかマラリヤ、栄養失調、疲労等で十三人が戦病死しました。私は同じ家に明治四十二(一九〇九)年生れの兵庫県印南郡阿弥陀村阿弥陀の網田金次郎と言う一等兵が、マラリヤのために寝起きしていましたが、彼は死期を感じたのか私に思い出し「槍錆び」を歌わして欲しいと言うので聞いて上げました。体力が無いので擦れ声で微かな口ずさみでしたが、間もなく心拍停止となって大往生をしました。この「槍錆び」は父が機嫌の良い時歌っていて聞き覚えがあったので印象に強く残っています。

それに彼は、昭和十八年三月入隊の補充兵で、

教育掛かり助手をしていた関係で因縁が深かった  
と思いました。

それからは人跡未踏の山岳地帯に入り、難行軍  
の連続でした。私は現役兵と言うので中隊の先頭  
を行進させられました。マツチを持っていてる者が  
ほとんど無くなり、古い襦袢を利用して火縄を作  
り、銃に巻いて持って歩きました。三日ぐらい山  
を歩いた時、水を見つけたため、かなり高い所か  
ら三百メートルほど下の谷に下りました。各分隊  
から元気な兵が三、四人、分隊員の水筒を肩に掛  
け、飯盒を手に提げて谷を下りました。そして水  
を入れた上で、谷底から懸命に谷を登り、それで  
飯盒炊さんして夜食を食べ、翌日の朝昼の握り飯  
まで作りました。

― 転進・七月、道無き山脈越えの飢餓行軍―  
第一日目（七月十四日）は十五キロほど進みま  
した。第二日目は二キロほど前進したところ、中  
隊長携行の地図は不正確らしく、川の無い所に水  
量の多い川があります。ここは蔓橋を作り渡河す

が倒れて動かなくなっているのを見かけました。  
我々は先に峰に着いた者がゲートルを外して、岩  
肌の急峻な所を越す者の銃や軍装を吊し上げる手  
助けをしました。さらに峰が続いていて今度は北  
東方面には山が無くなり、はるかにカガヤン河が  
くねって流れているのが望見出来ました。そして  
東の方から雲の固まりがアツと言う間にやって来  
て、湿気を含んだ水蒸気が通り過ぎます。

雲の去来と言う言葉は「大菩薩峠」の小説の文  
中であつたように思いました。端の雲がしよつち  
ゆう掛るためか峰全体が分厚い水苔に覆られてい  
て、靴もびつしより、腰も下ろせぬほどでした。  
長居は無用と東北の方角の高い山の峰から、岩肌  
を滑るように下りました。大分高い山だつたらしく  
寒さで震えました。

何時間も夢中で下りましたら、植物が生えてい  
る暖かい地帯に入りました。しかし雨が降りだし、  
夕刻露営することになりましたが、持っている携  
帯天幕、毛布、何もかも雨に濡れ、雨を避けるも

ることに決め、一日中この作業をさせられました。  
第三日目は十数キロ前進したら深い谷の起伏して  
いる山岳に入りました。

第四日目、第五日目は山を登ったり谷に下つた  
りの前進でした。沢山歩いたようでも険しい上が  
り下りで余り進んでいないようです。この山岳地  
帯は山蛭が多く、あまり高くない木に沢山棲息し  
ていて、下を通ると上から落ちて来て顔や体に吸  
い付き、中には目に吸い付かれた者もいました。

山の木の種類も違ってきました。かなり高い所  
に入ったと思われました。この山の七合目ほどの  
地点で日暮れ近くになり、中隊長は全員を集結さ  
せて「希望を持って山を登ること、各人に渡して  
ある糶米は、目下徴発採集のメドがないので、食  
べ延ばしをすること」を命ぜられました。

第六日目（七月十九日）  
この日は高い峰を踏破するので緊張していまし  
た。少し登ると岩ばかりになり、崖から下をのぞ  
くと、先行して滑り落ちたのか二、三人の兵

のが無いのです。後からくる分隊は雨のためか、  
まだ到着しない。携行して来た糶米も一人平均七  
合か八合ほどしか残っていない。皆が不安とずぶ  
濡れのため眠れぬ夜を過ごしました。

第七日目（七月二十日）  
この日は早朝に起きて、食糧が不安なので、食  
糧徴発のための部落を早く見付けるべく出発しま  
した。中隊の兵も強行軍や雨に濡れたり無理な行  
軍で、随分落伍者が増えました。どんどん山を下  
りました。生えている木や竹が低地の植物に変わ  
りました。川の源流らしき所で「この川に沿って  
行けば部落のある所に出るだろう」と言う者がい  
ましたが、中隊長の磁石は南の方に流れているの  
で、磁石に沿って東北に向かい、谷や丘を越えて  
前進しました。

越えて来た山脈の麓の丘陵地帯に踏み込んでい  
るのか、低地の小高い山や谷を登り下りして、竹  
藪の密生地帯に行き当たりました。竹の子が食べ  
られるのではないかと掘って飯盒に入れて茹でて

食べましたが、えぐくて吐き出しました。とても食べられる物ではありませんでした。

― 転進・高い山脈を越え低地に降り、

ピナパガンへ（七月末）―

第八日目、第九日目

小高い山や谷を登り下りしてから、大分低地を行進しました。低地へきたためか蒸し暑くなり、生えている木や草も変わってきました。林の中はジャングル状で行進しにくくなりました。私は中隊の先頭を歩いていました。各分隊共、道中でマラリヤなどで発病した者が多数落伍してゆきました。昨日ぐらいいから携行している粃米を食べてしまった者がほとんどで、空腹と食糧探しに皆が真剣になりました。

第十日目（七月二十三日）

川端より少し奥の林の中の広場のような所で、中隊長は後続の兵の集結を待ったための休止命令を出されました。各分隊が続々と集まってきました。そこで皆が情報の交換をした。

た粃米を預かっていました。私個人の粃米は三日前には食べ尽くしていても、これだけは小隊長の命令がないと手を付けられないと大事にしていた物だけに口惜しくて、中隊長に装具を丸ごと盗られたと、訴え出ました。所が中隊長からは「ボヤボヤするな大事な物は身に付けておけ」と怒鳴り返されました。

私は、分隊の兵の装具の置いた地点は、指揮班の少数の人しかいなかったもので、疑念が起こりました。計画的に盗られたと感じ、中隊長にじごの行動について伺ったところ「一週間以内に迎えに来るから、監視をしていくれ」と言われました。辺りは暗くなったので探すのを諦め皆と露営をしました。

第十一日目（七月二十四日）

この日、朝早く中隊はそろって軽装で転進を開始しました。私は盗られた装具中の水筒、飯盒は必需品なので一人で探して回りました。三時間ほど後に川添いの叢の横に背負い袋から粃米入りの

夕刻、中隊長は全員集合を命じられ「明日、前方のジャングル地帯を全員で切り払い前進する。明日の糧秣には野草を持って行くから、直ちに付近の林で採集して来るように」と命令され、見本の野草を掲げて見せられました。その後、私を呼び「川上上等兵と岡田兵長が発熱しているから残して行く、ジャングル伐開は軽装で無いと進めないで、中隊の携行装具等は残置して行くから、装具監視と病人の看護に残ってくれ」と命令されました。

皆より少し遅れたが、分隊の個人装具を残した所に私も同じように装具（背負い袋、携天、毛布、雑囊、水筒、飯盒、小銃等）を卸して、分隊の野草採集に行った方に走りました。日暮が近づき装具を置いた地点に戻ったら私の装具が盗られたのか無いので、分隊の兵と共に探しましたが見当りません。

私の背負い袋の中にはカシブを出発の時、中川小隊長から、小隊の救援米として靴下二本に入れて靴下二本だけ抜き取られ、後は全部そのまま見付かりました。そして岡田、川上が寝ている装具監視地点に戻りました。昨日採集した野草を飯盒で茹でて三人で啜りました。

第十二日目から第二十一日目（八月二日）

三人で寝たり起きたりして、食べられそうな物を探して暮らしました。川に入って貝や蟹、小魚を捕ろうと手分けして探しましたが、皆で食べられるほどは捕れません。また、小蟹を二匹捕り飯盒で茹でて食べましたが三日ほど便秘して困りました。また金柑のような実のなっている大木があり、沢山の実が落ちていたので皆で拾い飯盒で茹でて食べましたが、今度は激しい下痢に襲われ、排便の度に体力は消耗しました。三人で食物を探しましたが、野草を採集し茹でて食べるのが関の山でした。

毎日夕方になると、装具の置いてある所の大木の幹に短剣で刻みを付け、監視していた日数を記録していました。毎日いろんな部隊の将兵が、散

り散りバラバラでここを通過して行きました。

― 転進・七月末から八月―

(ピナパガン到着前、患者と装具監視後の行動)

日に日に衰弱して行くのが分かりました。監視の木の間が十になった頃、岡田兵長は食べる物が無く、このままでは餓死するから、諸畑のある所に移動しようと言いました。中隊から迎えるが来るまで待とうと説得しましたが、単独でも出発すると言いましたので、川上に意見を聞いた。このままでは餓死するかも知れぬから、食糧を求めて出発する方が良いと思います」と言う。

ちょうどその時、師団経理部の佐官級の将校が従卒を連れて通過されたので、事情を話し出発の許可を貰い、陸軍用箋に出発許可の命令書を書いて貰いました。中隊の残置器具には木の杖等を利用して、木の幹に許可を貰って出発する旨書いたものを貼り付け、三人で出発しました。

中隊の進んだ方向は、十日経っても迎えに来な

私はカシブを出る時、分隊長に「小隊の先頭を行軍するよう」に言われていて、中隊でも先頭で行軍をしていました。そのため後続のグループで体調を崩し、落伍して追及出来ずに落命していった戦病死者が多数いたとは知りませんでした。負け戦とは言え悲惨の極みでした。

昭和十六年徴集の私の同年兵も、満州を動員編成で出発時は十人でしたが、比島に上陸後に、行軍中に野戦病院に入院して戦病死したT君、バレーに着いてからマラリヤに罹り戦病死したH君、六月二十三日ピノン陣地で敵の迫撃砲弾で戦死したN軍曹、七月カシブ盆地で戦病死K少尉がおります。また、七月下旬から八月にかけてピナパガンに着いてから戦病死したE上等兵、A上等兵、M上等兵、Y上等兵、B獣医部伍長の五人は、終戦が一カ月早ければ死なずに済んだと思うと残念でなりません。

― 転進・八月、九月終戦を知る―

我が中隊も、六月末ピノン部落を出発の時は約

いだからと、他部隊の進んだ涸れた川筋の方に進みました。体力が無いので五分ほどトボトボ歩き、十分ほど腰を降ろしての休みながらの前進でしたが、いくらも進んでいないのに日が暮れて来て、平坦地でごろ寝の露営をしました。

第十一日目(八月三日)

この日は明るくなつてから、歩いては休みながら小さい丘を越え、湧き水のある川の源流のような所にたどり着きました。ここで腹一杯水を飲み、水筒にも満杯にして、皆を励ましながら前進しました。所々に木の幹に部隊の進行方向を示す図面が貼ってあつて心強く感じました。

七月一日、カシブに到着して、十四日ピナパガンに向け出発して、地図にも書いて無い高い山脈を踏破して、本隊はピナパガンに到着していました。七月末までに、カシブ盆地で十三人、ピナパガンに到着の七月末までに山脈や川筋で戦病死した兵は四十三人、合計五十六人の尊い命が失われました。

百五十人より若干減つていたと思いましたが。七月カシブ盆地に入り、十四日まで休養と食糧徴発している時、マラリヤ患者や栄養失調の病兵は薬が無いのと、気の緩みで十二人が戦病死しました。師団命令でカシブを出発の時は百三十五人でしたが、カシブから師団が命令した「ピナパガン」に行くのには、中隊長に渡された地図によると直線行程で、余裕を見て約一週間と言う話でした。そしてカシブで徴発した粃米を一人二升以上を袋と雑嚢に入れて背負い出発しました。

転進の道中は地図に書かれていない高い山脈の踏破でした。そのため無理な強行軍とマラリヤ等で病氣した者は行軍から落伍し、薬も看護も無いまま行き倒れ、高い山や深い溪谷では救援する者も無く、草蒸す屍になった兵士が四十数人もおりました。

したがって七月末に中隊は軽装でジャングルを切り払い二、三日後に「ピナパガン」に到着しました。戦後聞いた話によると、中隊が集結したあ

の辺りは米は栽培してなく、土民の家屋の中に隠してあった乾燥した玉蜀黍を徴発し、各分隊に割り当てて食事に当てたそうです。私の装具監視に残された地点には七月末になっても中隊から迎えないので、熱発患者の岡田兵長と川上上等兵の三人は、その辺りで食べられそうな物を探しながら、ひたすら食物無しで迎えを待っていました。この時点で中隊の残存者は九十数人に減っていました。

中隊は須山中隊長以下ピナパガンの徴発した家に起居して、専ら食糧の採集や、砂糖黍を採って砂糖作りをしていたと聞きました。中川（森）中尉は一人で沢山黍を担いで切り払い来た道を後戻りして、道端で落伍している兵に黍を渡し、食べて元気を出して早く中隊に追及するように激励して回られたと聞きました。自分の体も衰弱しているのに神様か、仏様のように思いました。

同年兵でラツパの高橋良男上等兵は、指揮班で仲が良かったのですが、彼は行軍途中でC准尉に帰った時、軍馬の治療用の葡萄糖注射液にカンパンを飯盒に入れ炊いて飲ませてくれて快癒しましたので、恩返しをせぬまに戦病死したB獣医部伍長には同年兵として特に残念に思います。

私が山から引率して復員した川上幸一上等兵、河内初次衛生上等兵の三人のことは後で記録します。最終段階でピナパガンで戦病死した三十人・復員帰国出来たのは六十一人足らずでした。

― 転進・ジョネス郊外カガン河の川原で  
― 方面軍使から終戦を知らさる―  
前述のように、八月三日、中隊は装具と熱発兵二人を残置し、私にその監視を命じ、一週間以内に迎えに来てやると約束されました。中隊は軽装でジャングルを闊開して、二日目か三日目にはカガン河畔に到着し、近くに逃げて、点在している土民の居ない家で、食糧を探し回ったと後日聞きました。大分経ってから中隊長は、堤指揮班長と元気な者を付けて、乾燥した玉蜀黍を持って後方にいるであろう落伍兵の救援に行かせたこの

つかまり、竹藪の地点で竹の筏作りをさせられ、一緒に川下りをして、浅瀬の激流地点で難破し、筏はバラバラに壊れ、高橋は足を負傷して歩けなくなつて川辺の洞窟のような所で休養していたそうです。

そこを中川中尉が通りかかり、事情を聞かれたようですが、その後黍を持参して中隊に追及するよう言われたようです。その時は傷が悪化して歩いて歩けず激励して別れられたのが最後になつたようで、同年兵として心から感謝しています。

それに引き替えC准尉は、同行していた兵も数人いたと思うので、皆で肩車しても、また急造担架に乗せても中隊に連れて行ってやって欲しかったと考え、残念に思いました。元気の良い兵を使い捨てにしたと思うと、慈愛精神の無い上官に従えば気の毒な結末を迎えて、ほんとに不運だったと心から同情します。

九月になつて、マニラに向け師団が出発直前、私がアメンバー赤痢で大和谷陣地に治療を受けにとをりました。我々三人は首を長くして待っていました。前記のように十日待っても救援は来ず、師団司令部の佐官が通られたので許可を貰い出しました。

二日か三日目に砂糖黍の畑を偶然に見付け、その畑に座り込み、三人は夢中で日が暮れても砂糖黍を噛りました。それで命は取り留められたのだと思えました。そして、その畑でゴロ寝しているうち明るくなり、起きると、元気も幾分回復しているのが感じられました。担げるだけ砂糖黍を背中に負うて、次の丘陵に向かいました。三人が歩けるのはわずかな距離でも、弱っている体力ではなかなか進めませんでした。しかし、直ぐ近くの谷には綺麗な水が流れ、家があれば近くに畑がある物と判断して、この家に落ち着くことにしました。ここで河内衛生上等兵がやって来るまで、一緒に暮らしました。

その日の午後、兵庫県温泉町出身の補充兵のD上等兵がこの家を見かけてやって来ました。これ

で全員五人になりました。

この夜、夜中にDが何回も家に上がり下りしていましたが、明け方に静かになり、夜が明けてもDは起きてこないで、河内が起こしに行つたところ、彼は絶命しているとの報告でした。皆で庭先に塚穴を掘り埋葬してやりました。その夜、大トカゲらしき物が塚穴を掘り返し死骸を噛っているの、また改めて塚穴を深く掘り埋葬し直してやりました。

次の日の明け方、猿の群れが近くの樹上に来て泣き騒ぐので、皆で銃で狙い射ちし、かなり大きな雌猿を打ち落しました。久しぶりに皆で料理して飯盒で炊いて食べました。脳味噌も北京料理には高級献立にあると言つて茹でて食べました。翌朝は子猿の声がして母親を探しているらしく可哀想に思いました。

近くの畑では何もかも採り尽くして、次の丘陵に進みました。ここには玉蜀黍畑が所々にありましたが、後一カ月以上経たねば成熟しないので、

兵隊が採り尽くした後の諸畑で諸の茎や葉を採り食糧にしていました。たまに木の根の下や、道の下に甘藷の実が残っていることがあり、見付けるが大喜びでした。

岡田、川上の両人も熱発で寝たままの日もありましたが、河内が同行して行きました。岡田は後方にある鉄道第八連隊の兵六、七人のグループの所で、玉蜀黍が完熟してから採取して出発するといつて一人で装具を持って行つたまま生還していません。多分土地のゲリラ兵に襲撃されたものと考えられました。

敵のゲリラらしい者が小銃を乱射しながら襲撃して来るようになりましたので、我々も合議の上、丘陵を下りてピナパガンらしき所に出ました。九月下旬頃と思われす。

ピナパガンの奥の丘陵地帯で、約一カ月食物を探しながら転々と移動し、命を繋いでいました。

この間大トカゲを捕つて食べたりました。南方の青い色の大きい鳥は、やっと打ち落して三人で

毛をむしつて見ましたら骨皮筋右衛門で、全く食べられる所が無く、がっかりしたこともありました。

ピナパガンらしい所ではどの民家にも夥しい軍装品が放置してあり、どの家にも数体の軍服を着たままの英霊がありました。川上、河内上等兵と共に家の中の食糧を探し回りましたが、先行部隊が漁り尽くして手に入りませんでした。カガヤン河に沿つて前進し、民家の軒下で露営して、野草を茹でて食べながら四、五日行軍したら、ジヨネスの郊外のカガヤン河岸で他隊の八人のグループに遭遇しました。

ここで渡河することを相談していたら、対岸から日本軍の階級章の無い将校服を着た人が、白旗を振りながら、米軍のジープとトラックでやって来ました。トラックからゴムボートを卸し、それに乗つて我々の所に来て、方面軍の降伏命令を伝えました。そして後から来る米軍トラックに武器弾薬を渡し、米軍の命令に従うよう命令し、自分

はこれから東方の山に残留している海軍部隊の所に行く、と言つて出発して行きました。

後から米軍のトラックが来たので熱発がちなので病院に入れるように頼み、ここで別れました。帰国後のことですが、戦友会「五四会」で再開し、無事を喜び合いました。